

あを 6

2021



山巡り 須賀忠男



十勝岳 2017.7.10
北海道の道庁中にある
望岳台の登山口から
噴煙を上げる大きな火口の
縁を通り頂上に立つ
360度の北海道を見渡す。〃

六月集

春そして

佐藤 喜孝

駄句 駄句と作りつつけて大石忌

初てふと蝶にこゑかく飛び去らず

春月や池江璃花子も水が出る

何の木かさくらふぶきの中に立つ

春の川ときをり動くうしろにて

むつみあふめてとゆんでと春の水

春の朝パンの四隅にジャムを乗せ

走り茶や窓は両手で開くるもの



春光

長崎 桂子

花すぎし土手さっぱりにペダル踏む
蓬餅季節の息吹かみしめる
下萌や坂道の色風やはし
田植機は大童農夫は嬉々と
春光の峰くだり来る風と水
公園の児等春光をほしいまま
春光や道端の草生き生きと
長閑さや同窓の老石の椅子
前々号正誤
家庭菜園崩れゐて草芽立つ

春の灯

森 なほ子

ふきのたう天ぷら花のごと開く
家々に記憶育てて春灯
灯を浴ぶる花も月明りの花も
春の灯に近寄りゆけばカレーの香
若桜銀色に照る幹の色
自粛なほ人の洩れ出る春の浜
白花水木咲いて街中清潔に
ふるさとの春の祭の日と思ふ



四月尽

赤座 典子

揺るる日々焦り時々竹の秋
十年間耐へても見えぬ春の虹
逝きし人「大丈夫か」と春の夢
診断は無罪放免藤の昼
落し蓋時々覗く若竹煮
図書館の休館となり四月尽



春の闇

秋川 泉

遅しき根にしっかりと露の臺
筍の歯ごたえやさし水の里
寝転びて菜の花畑かくれんぼ
おさげ髪山茱萸の花を日にかかげ
子どもらがはしゃぎかけ合ふ花銀杏
返信がのびのびになる目借時
長瀬の石畳なる春の闇
春の闇サイレンの音遠ざかる



空仰ぐ

大日向幸江

人も樹も自分探しの旅疲れ
夏帽を買ふタイミング計りけり
新聞の一面飾る海開き
投函のポストの口に雀の子
忘れられた五月人形空仰ぐ
桜散る足元を見る金次郎



春雑詠

七郎衛門吉保

信濃川蛇行しゆるめ雪解水
「あいこでしょ」はじけて火花春竈
春麗マスク少女の膝小僧
芝桜小さき花弁に蝶の口
好事家に粋を届ける浜防風
京漬物赤黄緑の夜半の春
葉山葵を揚ぐる長箸逆上がり
夏近し物干す竿に色少な



薄暑

篠田純子

木乃伊に胎児CT画像薄暑なる
土嚢に貼るレッテル白し青葉蔭
恭子さんのふれし八重桜に触るる
葉桜や長久院に弾のあと
新一年生有平棒を見てとほる
薄暑光銃眼からの東京都
例大祭こども歌舞伎は無観客



奇答

篠田大佳

耐ハイが積まれし歩道春あけぼの
長文に論旨のなくて春驟雨
ツイートの生成されて蠅生る
花明り孤独の時のたのしかり
夏めくや奇答の漢字練習帳



草の餅

須賀敏子

山椒の芽パンと叩いて立つ香り
草の餅買うて川沿ひ帰りけり
若布和三陸産にこだはって
風受けてやさしく揺れる花楓
校門を出て振り向けば若緑
時々光まぶしき四月かな
母の里十三詣記憶あり
斑雪宗谷本線一輛で



柴又「川甚」

田中藤穂

柿の葉鮎待つ縁台や春の川
吉野とは悲喜こもる山桜散る
山中を旅行く四人春の雲
山門へ落椿踏む石の段
コロナの春柴又「川甚」廃業と



烺收集

古里は鼈甲飴の中の泡
のぼりきし春満月を見よと呼ぶ
あれやこれ一人言いひ雛飾る
春の暮滅多に鳴らぬ家電話
極楽橋を一方通行花の雲
日脚伸ぶ三毛が茶トラを連れてくる
夕べには菜の花づくし白ワイン
春暁やカサコソ飲むは熱冷まし
春温し波郷石碑の反射光
啓蟄や九九唱えつつウオーキング
弁護士へ菓子折贈る春の雨

佐藤 喜孝
田中 藤穂
長崎 桂子
森 なほ子
赤座 典子
秋川 泉
大日向幸江
々
七郎衛門吉保
篠田 純子
篠田 大佳



エプロンに甘夏柑の重さかな
ああさうだ今夜は東京大空襲
数を増し明るさも増す黄水仙
注射針刺さる誰が肌春寒し
雪戻し済みし水田の静まれる
病む人の窓辺静かに花吹雪
退院の意気込みもなく弥生尽
万緑の梢に眠るシンデレラ
雪解水溢れて道の反射鏡
花明り己が足跡見うしなふ
啓蟄や猫そそくさと通り過ぎ

須賀 敏子
田中 藤穂
長崎 桂子
森 なほ子
赤座 典子
秋川 泉
大日向幸江
々
七郎衛門吉保
篠田 大佳
須賀 敏子



マスクしてみんな麗人春の街

佐藤喜孝

街には色とりどりの、素材も豊かなマスクをかけて、人々が歩いています。大声で話しながら大人数で行く場面も、めつきり少なくなりました。緊急事態宣言が度々発せられた事により、世間はすっかり上品になったようです。街にはマスク美人ばかりです。

かにかくに無季語となりしマスクかな 坂崎重盛

(純子)

春禽のいさかひてゐる手を出さず

佐藤喜孝

鳥の喧嘩の声はすさまじく、緊迫した雰囲気になります。「手を出さず」にさまざまな読み方があります。自然に任せて鳥に任せようとも思うし、手を出そうにも人の届かない屋根や森の上に鳥がいるかもしれない。口出ししようにも鳥と会話ができない、鳥の目が据わつていて怖くて手が出ない……。自然の成り行きに任せるのが穏当ですが、喧嘩を見てどのように振る舞うか、深読みしてしまいました。(大佳)

草萌やスニーカーにも解れあり

須賀敏子

スニーカーに解れを見つけた。スニーカー「にも」とあることから、解れが二つあることを示唆しています。解れは、眼前の草萌よりそのような句意が誘導されて、心の中に絡まったわだかまりが解けたと読めます。スニーカーの紐の解ける様子は、軽やかです。(大佳)

春大根酢漬け土産に友の来る

田中藤穂

春のあたたかさが見えてきます。ご友人が手土産に選んだ春大根の酢漬けについて、味がすぐに想像できなかったもので、レシピを見たり大根の情報を見たりして、想像を膨らませました。すぐにはできないけれど、一年も時間をかけて作るものではないということや、さっぱりしている印象を受け、程よい距離感の友情を窺わせます。(大佳)

家庭菜園崩れて草芽立つ

長崎桂子

家庭菜園が崩れた。温室が崩れたのか、作物が雪で押しつぶされたとか、風で倒されたとか、細部の想像がうまくいかないのですが、菜園が崩れたという短いフレーズで自然の脅威が伝わってきます。失意を思わせながら、崩壊した土の上に芽吹きがあり、再生を予感させる景と読みました。(大佳)

春眠の遙かな旅を戻りけり

森なほ子

夢の中では随分遠くまで来てしまったのでしょうか。経験や情報のある中で遠いところ、外国の都市なのか、観光名所なのか。どこへ行っても、春眠がゆったりとした夢を示唆します。しかし、夢から覚める時は一瞬で、はるばるとした旅路から一瞬で寢室に帰ってきます。旅から帰ってくることの寂しさを読みます。(大佳)

どこまでも漣少し春夕焼

赤座典子

さざなみの音が聞こえてきそうなほどの春の浜です。夕景と海が映えあつて、シティポップのアーワークのような穏やかな海の光景が浮かび上がります。作者の穏やかな心情が伝わってきます。(大佳)

追ふほどに根元の見えぬ春の虹

秋川 泉

科学はあれこれ理屈を言ってくるでしょうが、「虹の根元」という未知なるものへの好奇心は、詩や科学の祖であるように思います。「なんで」と虹への観察を深くすることが、虹の仕組みを解明したり、虹への情緒を深めることとなるでしょう。(大佳)

良く噛んで一言多し蓬餅

大日向幸江

「良く噛んで」は、言葉を噛み締めるという比喻表現とも蓬餅をよく噛むとも取れます。前者の解釈で読んでみると、「一言多し」は、茶の席でちよつと言い過ぎたかと思いつつ、蓬餅の味でケ・セラ・セラな気持ちになったような景が見えます。(大佳)

再補強した本棚に春日差

七郎衛門吉保

春日差は心情表現としての度合いが強いと思います。本棚の補強で頼りなくも不安を解消したという光景が見えます。人事を尽くして天命を待つ句から、未来一般に対する漠然とした想いをも読みとることができます。(大佳)

梅が香や完治と思ひ込む寛解

篠田純子

プラセボ(偽薬)に効果が見られるように、人間には思い込みの強さがあるようです。自分も完治したんだと思ひ込むことによって、寛解(病状の安定)の予後をよく過ごしているようです。好事魔多しと言うように、危うさもあるかもしれませんが、作中主体は、不安に囚われるよりも風流に関心を移すことで、不安を脳の片隅に追いやっています。思い込みの力を信じて。(大佳)

七十縄跳ダンス冬日向

篠田純子

しばらく純子さんにお会ひしてゐない。この句から純子さんいきいきと生活されてゐることを知ることが出来た。「七十路+冬日向||日向ぼこり」がさしずめの計算式だ。縄跳の上に縄跳でダン

スとは恐れ入った。きつとお歳をとるのを忘れてゐるのだらう。(喜孝)

春の暮降車サインを躊躇へり

篠田大佳

他人を慮り、遠慮している作者が、バスの降車ボタンを押しあぐねています。妙齡の手がボタンの傍にあり、躊躇っているのでしょうか。きつとバス一駅を、乗り越えたことでしょう。(純子)

桜まじ人の気配のない普請

篠田大佳

昔の普請現場を知ってゐるものでなければこの句は生れない。普請といふとまづは民家。でも今はビルでもいつの間にか音を立てず建ててしまふ。しばらく通らなかった道の様変りに驚くことにたびたび出会う。私ごとだが釘を打つ調子のよい音を思ふだけでなぜか蛙の目借時になる。(喜孝)



佐藤喜孝

長崎桂子

青き踏む喘ぐ眼下に濃尾平野
春愁ふヤングケアラの児と労苦
国体の炬火の火おこし三重の春

○春になる。足取りも軽く野に出る。気が付くときだいぶ歩いてきたやうだ。くたびれたが濃尾平野を一望のもとにして気持ちがいと。健脚な作者がうらやましい。下五のリズムの間延びを考へたがいい案が浮かばなかった。

○このところ桂子さんの句にカタカナが登場する。私の知らない言葉ばかりである。

フレイルを日日心がけ春兆す
サルコペニア防ぐ筋トレの夜長
初花やフレイル痛のまだ癒えぬ

これらの言葉は私が知らなければいけない事柄であった。この句の「ヤングケアラ」も調べることになる不勉強さである。桂子さんの句から教へをいただく生活の姿勢には範としなければと反省する。

○「炬火」は「こか」とも読み「きよか」とも読むらしい。三重の炬火イベントは四日市市で四月十八日行われたやうだ。桂子さんも御覧に行かれたかもしれない。「三重の春」と高らかに詠まれてゐる。

森なほ子

ふるさとの春の祭も過ぎにけり

ふるさととは遠しと来り春の川

昭和の日コロナ・スマホの無き頃よ

○ふるさとに居ての述懐か、ふるさとを遠く離れての思ひか考へた。どちらとも間違へてはないが後者が私は気に入った。おもひをはるかな時空へ馳せる。「けり」の働いた好きな作品である。

○この句を読めば前の句の私の鑑賞はなほ子さんの作意とは異なった。

「遠し」はただ交通に時間がかかるという意味でだけではない。この「だけではない」遠しとお

もひつつ来たふるさとの春の川。どの様になほ子さんの裡を流れたことであらう。

○正確に「昭和の日」の意義を知らないのでしたらべた。

祝日法の一部改正によって平成十九年に制定された祝日で、日付は昭和天皇の誕生日である四月二十九日に。趣旨は、「激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」と。昭和に生まれた私には祝日だと浮かれてはいられない日であった。なほ子さん今の世をコロナとスマホで象徴された。しかし昭和と比べて今をどう思はれるのかが知りたいところ。「○○や昭和も遠くなりけり」の○○に何が相応しいのか。個人そぞれかも知れなが昭和を過ごした人が肯ふ季語があるやもしれぬ。

赤座典子

蛤の今や絶滅危惧種とは

「ひさしぶり」駆込んでくる木の芽風

久々の子等のさざめき草若葉

○身近にあたりまえにあったものが、いつのまにか絶滅危惧種にと。作者とともに驚くばかりです。句の表現は「蛤の」と息継ぎもせず下へ繋がってゆくと、事柄の報告に傾きがち。句を「とは」と

としてゐるのでその危惧はしなくともよいのだが。これを「蛤や」と一呼吸置けば読む人それぞれの蛤が浮かぶ。時事的俳句も切字のやの力を借りてみるのもよい。

○寒い時は換気のための窓を開けるのも躊躇はれる。ところが今日はどうだらう。お久しぶりねと木の芽風が家の中に入ってきた。季節を敏感に感じ取られた俳句。

○子どもの道路で遊ぶ声がすると嬉しくなる。久々に聞く子らのさざめき。典子さんもきつとほほゑみを浮かべて居られることであらう。

秋川 泉

イースター神父と僧侶手を取りて
待ちわびた郵便受に落の臺
湯に放ちさくら色なる浜防風

○「イースターは復活祭、キリストの復活を記念して春分後の満月直後の日曜日に行う祭事」と。この祭にキリスト教の神父と仏教の僧侶が仲良くイースターに参じてゐると。宗教の締め付けに緩いといはれる日本らしいほほゑましい光景。この句の僧侶は泉さんの父君、神父は父君の友人と聞く。このやうな環境で育った泉さんがうらやましい。

○前にメールか電話で「落の臺を送るよ」の連絡が入ってゐたのだ。郵便受を覗く。何度目かに待望の郵便物が郵便受にあつた。手にした時のしつとりとした重さ。春の便りである。

○浜防風は、防風・はまにがなといふセリ科の植物。私のこの菜の好きな食べ方は、炊き立ての白飯に浜防風を刻んで混ぜ塩を振って食べる。まさに春そのものを食べる食べ方。泉さんは茹でてゐる。なにが出来あがるのだらう。湯に放った浜防風がさくら色になつてゐる。食べものはおなかを満たすのみではなく心も満たすもの。

大日向幸江

争うてゐるらし様子夜の目高
夏めくも人声の無いアンコール
竜宮に水の痕跡種を蒔く

○「ゐるらし様子」は詰めすぎた。「ゐるらしき様子」又は「ゐるらしい様子」と。で、「争うてゐる様子なり」としたい。

目高を觀賞用に飼ふ。ただ可愛い、きれい、涼しさなどと眺めてゐる内に目高のちよつとした動きから、目高の感情？までわかつた気になるものだ。夜中の無聊を慰めるのに音もせぬ目高や金

魚は格好なもの。私は田螺や泥鰌を飼ってゐたことがある。あの田螺でも日によつて違ふ様相を見せてくれた。何句か田螺と泥鰌からいただいた。

○「アンコール！」と声が掛からなかったと云ふのだらうか。クラシック・コンサートだと拍手を止めずに奏者を舞台に引き戻すのだが。季語の働きとともに分からなかった。

◎竜宮は海の底にあるのに「水の痕跡」とはだういふことか戸惑った。気が付けば気宇壮大な作品だった。「竜宮」は「リュウグウ」と書いてくださればすぐわかる。あの宇宙に浮かぶ小さなざれ岩のこと。そのリュウグウに含水鉱物を発見といふ知らせがあった。そこから夢見る幸江さんは物語を紡いだ。何の種を蒔かれたのか知りたいものだ。私は陳腐だがすぐ桃の木かなと思つた。

七郎衛門吉保

文机のオバマの著作目借時

歩数計三桁に終る春規制

春の雲如くの旅やいつ戻る

○オバマの回顧録であらうか。文机に置かれてある。興味があつて求めたが読む意欲が失せたのだらうか。そのやうな感じを季語「目借時」から受け取れる。「目借時」は「蛙の目借時」の略。「鶴

瓶落し」で秋の落日のやうすを表すやうに、俳句の短さゆゑの短縮は暗黙の了解。日常でも言葉は短くなる傾向にある。長くなつた験はない？私のデータベースでは「目借時」が267句。「蛙の目借時」が44句。江戸期の「年浪草」に「只めかり時とのみ出せるはことならず。必ず蛙のめかり」と云ふべし。」と早くもこのことを嘆く人がゐた。

○「万歩計」は歩数計の商標だが同じやうに使はれてゐる。万歩計と云ふからには最低一万歩歩かないと気が済ま脱が、疲れることより結構時間がかかるもの。一万歩に届かぬウォーキングは終了してしまつた。「春規制」があるからだと言保さんは嘆かれてゐる。「春規制」は俳句に使ふには難がある。私は時の流れを俯瞰する目が欲しいと常々思つてゐる。

○自由気ままに旅ができるやうになるには、いつまで待てばよいのかと慨嘆してゐる俳句と読んだ。「春の雲如くの旅や」は名詞＋如く、または名詞＋やうだは「の」でつなぐと意味が通りやすい。「いつ戻る」で実際には旅をしてゐない。ので「旅や」せず「旅の」・「旅は」では。

篠田大佳

W・I・F・Iはかなしき波動水温む

春雨や灯されてゐて黒き傘

夏めくや死蔵されたる忘れ物

○Wi-Fiは無線で機器同士がつながる技術。電波は確かにいはれてみれば波動。「愛しき」といはれればさうかもしれないと思ふ。動物や植物により人は癒される。逆に人の行為により植物が反応してゐるのではないかといふ研究者もおられるとか。石のやうな無機物にも人の心は反応する。さて電波は物ではないので無機物よりも心もとなない。この電波をかなしき波動とは驚いた。喜怒哀楽を乗せて飛び回つてゐる「Wi-Fi」。これを「かなしき波動」とはナイーブな感性。「水温む」の季語に癒される。

○「黒き傘」はお通夜のやうな暗いイメージ。「春雨や」との違和感がこの句の特徴。「春の雨」ではダメ。灯されて夜の暗さに浮きたつ傘は心に遺る。

○いろいろの方面から考へたが分かりにくかった。具体的な「忘れ物」ではない。忘れ物といふモノ。死蔵とは利用すれば生きるモノが生かされてゐないこと。夏になったら思ひ出す忘れものかもしれない。

須賀敏子

桜草咲いて貴女は十七才
コロナ禍に喜の字の祝ひ桜草
ワクチンの知らせ待ちつつ四月尽く

○芳紀十八歳といふ言葉もあるくらいまぶしいくらい輝く年代。この句の「貴女」は桜草に例へられた。見事なお祝ひの句である。句を贈られた「貴女」もこの句を読まれたらどんな顔をするか想像するだに頬が緩んでくる。この句から遡ること五年前（二〇一六年）七月号に

夏きざす十二才のピアノ力満ち
を発表。そして二〇〇九年七月号に

初夏の山道五才に追ひ越され
を。モデルはみな同じ「貴女」なのかなと思つた。

○コロナ禍の中、喜寿のお祝ひをなされたやうだ。十七歳の「貴女」に桜草。七十七歳の貴女も桜草。コロナ禍では晴れ晴れとは喜べなかったが、桜草の共演は見事。

○「ワクチンの知らせ」は、分かることは分かるが。時事をテーマにすると俳句はたちまち機能不全になる。本来時事俳句は無理なのかと思ふくらひに難しい。私にも「新型コロナウイルスワクチン接種クーポン券在中」といふ分厚い封書が届いてゐる。敏子さんは行動力のある方。早くコロナワクチンを接種して両手を振って町を野を歩きたいのだ。

田中藤穂

児童公園 残花の下の滑り台
滑り台の母と幼子風みどり
草萌えやヨチヨチヨチと足達者

○万葉の代は桃の花の下照るところに乙女が佇んでゐる。俳句では桃の花が残花となり乙女は滑り台になった。軽口はさておき無人の滑り台が目に見えかねた。はらはらと名残惜しみつつ散る花の下にある滑り台は一景である。「児童公園」は描写過多。

○幼子は飽きもせず梯子を昇っては滑り降りる。母親はそばではいらしながら見守る。公園でよく見かける光景である。季語は「風みどり」。手元の大歳時記には「青嵐・風青し」がある。緑風は広辞苑に初夏の風とあるがなぜか歳時記には未載。88辞書に「緑風・青葉を吹く風、初夏の風、薫風」とあった。生まれてくる季語もある。俳句は元氣だ。

○ちよつと前なら気にも留めなかったかもしれないぬ句、藤穂さんもちよつと前なら作らなかった句かもしれない。体の変化につれて見えてくる景色も変化する。草が伸びるやうに子どもは成長は早い。歩く喜び、歩けるよろこびを子どもは知る。倒れてはまたヨチヨチとすすむ。温かく見守る作者。「足達者」に羨望が現はれてゐる。

黒い経済

秋川 泉

特殊潜航艇という筒化吹雪 東京都 生島 玲
読売俳壇に掲載された句。私には全く分らず、藤穂さんに詳しくお話を伺った。沖縄、長崎、広島と戦火の跡を訪れ、戦争の事は幾分知ったつもりであった。しかし、特殊潜航艇のその出来事に言葉を失い、実は何も分っていない自分を恥じた。今も小さな戦いはある。武器を作る。売る。戦争がないと売れない。戦争は、黒い経済活動。その闇の経済活動が、実は大きく経済を動かす。そういう事は報道されない。生命こそを商品にする。戦争がないと困る商売の現実を知る事は、ぞつとする程寒い事だ。

涼

自然の風

大日向幸江

今年の夏はどんな夏になるだろう。
私は今までクーラーは避けてきた。寒がりやの私にクーラーの風は強いし心地良くなかった。私に合っているのは自然の風だ。団扇、網戸、そんな物で生きてきた。今年もそれで良いかな。

仮の網戸

篠田大佳

家族はエアコンが苦手なので、気温が上がりにくいところは、窓を開けて風を入れています。家には網戸がないので、虫や鳥が入り放題に入ってきます。昨年、ネット通販で見つけた簡易網戸を導入したところ、調子良く機能しています。安物なので過剰に期待はできませんが、目にも涼しげです。

六尺

田中藤穂

子供の頃、家のすぐ並びにタオル屋の丁さんという家があった。その小父さんは夏になるといつも六尺褌一本の裸で暮らしていた。店を出れば、車一台通れる程の道で、前はお寺の石塀。斜め前の交番まで十歩で行ける。タオルを入れた箱が沢山棚に置いてあったが商売をしているのは見た事がない。小父さんは交番へ行ってお巡りさんと世間話をしているが、その時も六尺一本で互に違和感もなく……あれはあの頃、最高の暑さ対策だったのではないかと今にして思っている。

夕涼みよくぞ男に生まれけり 宝井其角

あをきーワード俳句辞典(へにへに)

紅

母の日の花束を抱き妻にも紅
朝の日や石榴の紅を磨き上ぐ
くるくると紅の縁取り菊垂る
杉折に紅のうつりし冬磧
投票場夾竹桃の紅淡し
紅萩や一人の家の雨戸鎖す
鶏頭や風の清しさ紅褪せる
黒雲といふ名の梅の紅の色
花待ちの若木ほのかに紅をさし
ぶるぶると紅震はせつ雉子の飛ぶ
わが服よりこぼれ置に紅の萩
蝦蛄葉さばてんその日その日の紅の色
春宵や紅花いろに可良の糸
濃き紅に染まりて浮かぶ花桃苑
紅殻が指から落ちぬ冬日中
春の雪紅少し濃く家を出る
際立ちて薄紅の薔薇微笑めり
紅の色変へてみやうか虎が雨
薄紅の秋明菊は物問ひたげ
訃報また大輪椿紅曇る
水引の紅沿ふ黒き御影の碑
空遠く一刷の紅冬桜

堀内 一郎
早崎 泰江
赤座 典子
佐藤 喜孝
早崎 泰江
田中 藤穂
長崎 桂子
佐藤 喜孝
鎌倉 喜久恵
赤座 典子
田中 藤穂
赤座 典子
山莊 慶子
佐藤 恭子
田中 藤穂
長崎 桂子
赤座 典子
田中 藤穂
赤座 典子
大日向 幸江

初買の卵二箱紅淡く
冬萌にほのかな紅の心意気
白菊の優等賞に紅走る
初暖炉もてなす主紅の濃く
物忘れ風邪のせいにし紅を引く
冬の草古き口紅妙な味
病む母に赤き口紅寒卵
三月の頬紅変へて病上り
病む友や薄紅色の蓮の花
万両や葉影も紅に染まりつつ
黄に紅に川流れゆく町に來ぬ
訪ぬれば酔芙蓉はや薄紅に
枝倒れたれど実千両紅を増す
寒木瓜や蕾に紅の点り初む
唇に触れるマスクや紅のあと
他界でもプラムの色の紅を点し
抱かれて紅濃くさして祭の兒
薄紅の芋茎をまづは小鉢にて
空の青も冬椿の紅も濃かりけり
春闌くる紅に重なるちがふ紅
母の差す愛嬌紅は秋の暮
曼珠沙華天が紅とはちがふ色
油紅抱へし人とこの櫻

大日向 幸江
長崎 桂子
篠田 純子
赤座 典子
田中 藤穂
篠田 純子
須賀 敏子
赤座 典子
須賀 敏子
長崎 桂子
井上 石動
秋川 泉
長崎 桂子
赤座 典子
黒澤 佳子
七郎衛門 吉保
田中 藤穂
赤座 典子
赤座 典子
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝

クリオネは立泳ぎして紅差して
何もせず酔芙蓉はやうす紅に
晴れて山茶花の紅の気の漂ふ
山茶花や妹は紅姉は白
初鏡娘の紅を盗み塗り

ヘモグロビン

ヘモグロビンコレステロール梅雨に入る

部屋

子供部屋ピアノの跡に冬日差
部屋毎の柱に凭る猫の恋
落葉松散る気配パン焼く朝の部屋
妻さがす二つの寒き部屋はあり
菊の香の満つ部屋ベーターベンを聴く
夕明り障子閉てたる部屋白し
蠅生まれ雨夜動かぬ部屋の隅
百色の折紙散らす梅雨の部屋
ボランティアの控の小部屋黴臭し
戸を閉ちて部屋の暗がり百合匂ふ
部屋の隅姿は見せぬ虫の秋
帰郷終へ戻りし部屋に冬のバラ
段ボールみな送り出し春の部屋
段ボールまだ部屋にあり春の雷
小さき部屋広くなりけり春の風

佐藤 喜孝
田中 藤穂
長崎 桂子
森 なほ子
佐藤 恭子
佐藤 喜孝
早崎 泰江
赤座 典子
堀内 藤穂
堀内 一郎
長崎 桂子
鎌倉喜久恵
田中 藤穂
田中 藤穂
篠田 純子
渡邊 友七
早崎 泰江
齊藤 裕子
齊藤 裕子
齊藤 裕子
齊藤 裕子

一人居の部屋へじんわり夏木立
六月や部屋まで届くわかみどり
黴の部屋どこにも隙のあるごとし
夜の雪部屋の真中に紐さがる
空ら部屋に舞ひ冬蠅や移り行く
オーロラやスチームの部屋睡くなり
発つ人の温もに残る冬の部屋
雛の間といふおどろおどろの部屋ありし
制服黴章朱房の喇叭黴の部屋
破芭蕉裸電球ともる部屋
鬼やらひ使はぬ部屋は念を入れ
日脚伸ぶ畳の部屋のおもちや箱
点滴に冬日の届く箱の部屋
黒猫が部屋をのぞけり春一番
片栗や軋動せし子の部屋広し
竹活けし部屋青々と星祭
郁子の実や一人居の部屋灯で飾る
立冬の部屋に一匹ちろ虫
九州場所貴乃花部屋閑として
明け渡す部屋片付かず春の風
春昼の部屋を灯せばなほ暗く
盆提灯しまひし部屋のうつろかな
大部屋に声まじり合ふ牡丹鍋

赤座 典子
長崎 桂子
堀内 一郎
佐藤 喜孝
渡邊 友七
須賀 敏子
齊藤 裕子
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
佐藤 恭子
鈴木多枝子
須賀 敏子
篠田 純子
田中 藤穂
須賀 敏子
田中 藤穂
赤座 典子
田中 藤穂
田中 藤穂
齊藤 裕子
芝 尚子
田中 藤穂
鎌倉喜久恵

白髪の女片膝春の部屋

部屋の気の澱む卯の花腐しかな
部屋の奥まで公園の金木犀
志野茶碗しづしづ点前雛の部屋
野良猫が部屋のぞきをり十三夜
子等の部屋夫と静かな日向ぼこ
千両や部屋に祝賀を漂はす
部屋部屋にあちさみを活け雨をきく
目覚むれば梔子の香の部屋に満ち
戻りきて部屋にこぼせる萩の花
雀の子確かむるごと部屋覗く
梅雨寒にマグリツトの部屋迷ひ込む
盆提灯仕舞ひて部屋の広くなる
夜更なほ残暑たつぷり二階部屋
しのび入る木屋の香や部屋ゆふべ
部屋移りドームを望む冬日和
空つぽの部屋に咲いたるシクラメン
ふゆいちご人待つ部屋に香を満たす
風邪の女子寮生お部屋に戻りたくないの
六枚の私の部屋の畳替
煤逃げの弟子また一人父の部屋
亡き母が部屋のどこかに震るる夜
花の雨気ままに部屋の模様変へ

須賀 敏子
長崎 桂子
篠田 純子
長崎 桂子
田中 藤穂
齊藤 裕子
長崎 桂子
田中 藤穂
田中 藤穂
赤座 典子
秋川 泉
田中 藤穂
長崎 桂子
井上 石動
赤座 典子
大日向幸江
赤座 典子
篠田 純子
須賀 敏子
田中 藤穂
田中 藤穂
大日向幸江

部屋片つけちゃんかなりモート盆踊
秋暑し部屋半ばまで朝日さし
春の陽の部屋中に充ち眠くなる

ベランダ

立冬やベランダからの富士の山
ベランダの椅子一脚の秋思かな
ベランダに干柿を揉む美味くなれ
ベランダの金魚草よけ布団干す
ベランダに初めての花秋なすび
ベランダに囲はれてをり藤の花
ベランダに足場組まれて秋厚し
ベランダの開き過ぎたるチューリップ
ベランダの風船かづら種を採る
ベランダの黄砂をなぞる屋下り
ベランダに富士見ゆる日や干大根
芋虫の大移動せるベランダを
芋虫ふえ食糧難がベランダに
ベランダに異常発生青芋虫
今年もねベランダからの初の富士
ベランダで爪切る人に木の芽風
ベランダの茄子紫に宝めく
マンションのベランダ自在恋の猫

篠田 純子
森 なほ子
田中 藤穂
須賀 敏子
後藤 志づ
須賀 敏子
齊藤 裕子
芝 尚子
芝 尚子
芝 尚子
赤座 典子
須賀 敏子
齊藤 裕子
齊藤 裕子
齊藤 裕子
須賀 敏子
赤座 典子
森山のりこ
須賀 敏子

あとがき

おもしろし

俳句の鑑賞や評文に「面白し」といふ語彙をよくみる。私も使ふ。この言葉ほど俳句の核心を突く言葉も少ない。「面白し」と一言でいふがなかなか奥の深い語彙。似た言葉に「をかし」がある。もしかしたらこの言葉「おもしろし」・「をかし」は俳句に限らず芸術全般の物指に使へる。そして作り手の制作意欲の源にもなる。

私の一月。二月作品は会員の氏名の一部を詠みこませていただいた。軽いをかしみを期待した。

コロナワクチン

看護師の嫁がコロナワクチンが余ってゐるから打ちませんかといふ前にいはれた。親切に勧めてくれたのにテレビで見ると痛さうなのでなんだかんだと屁理屈を述べて回避した。しかし皆さんと会へる気配がしてきたので予約に取り掛かったが、申込者が多いのかネットはメンテナンス中、もちろん電話もつながらず予約はできない。といふ騒ぎのすゑに予約した。オリンピックも始まる。世の中が動き出す気配がしてきた。

短文のお題「ほたる」

むかし、「千葉のおばさん」といふ職業があつた。私は蛍を見た事がなかったのでおばさんにお願ひしてみた。後日戴いた数匹の蛍を夜になり蚊帳の中に放した。疲れていたのか機嫌が悪くあまり瞬かなかつた。それでもおばさんのお蔭で蛍といふモノを見ることが出来た。蛍のことを思ふと手拭を被つた親切な「千葉のおばさん」を懐かしく思ひ出す。それにしても螢にはかわいさうなことをした。(喜孝)

二〇二一年六月号

発行日

六月十七日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)